

## 第七章 事務機械・文具・洋品の商況

### 一 事務機械

この時代に入ると、大企業における計算用機械は単能機械ではなく、人工頭脳ともいわれる綜合機械になっていた。

昭和三十六年に入り貿易自由化の範囲は拡張され、重工業関係品目三〇〇もの自由化が認められた。しかし、国産品育成の方針から、電子計算機については技術提携による以外完成された製品の輸入は認めないという方針が示された。一方この年三月、ローヤル・マグビー・インターナショナル社 A. F. Niendorf 社長が来日し、ローヤル社が IGP-30 電子計算機の取扱いを中止し、ジェネラル・プレシジョン社が取扱うこととなったこと、ジェネラル・プレシジョン社は、IGP-30 電子計算機の日本における総代理店として、三菱商事と契約を結びたい意向を明らかにした。諸般の事情から当社もこれに同意した。昭和三十七年五月十一日に三菱プレシジョン株式会社が創立せられ、同社は、昭和三十八年六月、ノックダウン方式による国産電子計算機 MGP-21 超小型電子計算機を完成発表した。一機の価一、〇一五万円であった。そしてこの年十一月、当社は MGP-21 の国内販売契約を三菱プレシジョンおよび三菱商事との間に締結し、同年十二月、事務機械部に新たに電子計算機課を設け、同機の販売活

## 第八章 資本金と営業成績

### 一 資本金の増額

当社は、昭和三十五年七月の増資によって七億八、七五〇万円となつて以後、暫らく増資はしなかつた。

昭和三十七年十月八日臨時取締役会において、新たに七八七万五千株を増資することを決定した。而して昭和三十七年十月三十一日午後五時現在株式名簿にある株主には、所有株式一株に対し新株一株の割合を以て割当てる（割当の結果生ずる一株未滿の端数は切捨てる）ことにした。発行価格、払込金額共に一株につき五十円、申込期間は、昭和三十八年一月十日から二十二日まで、払込期日は昭和三十八年二月一日であつた。と同時に資本金の端数調整のため、一株当り二一五円の公募価格を以て有償新株式を三七万五千株発行した。

この増資によって、資本金額は七億八、七五〇万円から十二億円に増加した。

### 二 営業成績

この章のはじめに記したように、昭和三十六年と四十年の景気の上下は激しかった。しかも技術革新のテンポの早さは、当社の営業品目にも影響した。昭和三十六年九月二十一日の取締役会は、営業品目の増加を決議し、従来

動を活発に開始し、国鉄本社運輸局旅客課との間に、MGD-21 電子計算機第一号の販売契約に成功した。昭和三十一年三月のことであった。同年九月には東京光学機械株式会社に一台を売込んだ。

一方モンロー社もモンロポット―11電子計算機を開発、日本への売込みについて Sullivan 会長と Ricciardi 副社長が来社した。用件は同社のモンロポット―11電子計算機をノックダウン方式で日本に輸入する件についてであった。当社との間で種々話し合った結果、モンロー社はこの件については、理研光学株式会社を総代理店として契約を結ぶこととなった。ノックダウン方式とは、部品を解体して送り出し、輸入国現地において組立てることで、わが国では自動車輸出の場合などに用いられている。

昭和三十六年―四十年の五年間は、電子計算機は、国産品育成の方針から、その輸入が殆んど不可能となる一方、日立、東芝、三菱、松下、沖などの各電気メーカーが電子計算機を中心に事務機械業界に進出して来た。この挙は、従来これらを取扱ってきた伊東屋、黒沢商店、当社などを苦しい立場に立たせた。

こうしたなかで、昭和四十年三月、事務機械部で開発したビル・コンピュータ「ロイマック二〇一」(伝票発行用超小型電子計算機)が完成した。このビル・コンピュータは電子計算機の演算装置と電動タイプライターを組合せたもので、東京電気化学株式会社の製造であった。費用の点でも電子計算機より安く、扱いも簡単で中小企業を対象として販売した。

ここで、当社が販売したモンロー計算機の台数を掲記しておこう。

贈与を受けた。

また先に複写機の出現によってタイプライターの売行が鈍ったことを述べたが、当社ではこれに対応して写真複写機マルゼンフォトコピーを製造、昭和三十七年五月から発売したが、期待した程の販売実績をあげることが出来ずその後販売を中止した。

## 二 文具・事務用品

文具品についても二、三のことを特記しておきたい。

この頃は、アメリカなどでは、万年筆はサイン用に使用されるだけで、文書は殆んどタイプライターに依る傾向にあったが、わが国では文字の関係もあって、携帯に便利で書きよい耐久力ある万年筆を必要とし、ボールペンという大変便利な筆記具が出てきて、万年筆の需要は一向に減らず、当社製のアテナ万年筆をはじめとして、舶来品ではモンブラン、ウォターマン、パーカー、ペリカン、シェーファ等々、それぞれ交らぬ売行きを示していた。ボールペンについては、昭和三十六年十一月ジレット社製パーマイトボールペンの日本総代理店として輸入販売を開始、好評であった。

アテナ万年筆も、年と共に工夫を重ねてきたが、昭和三十六年十二月には、アテナ・ジュエル万年筆を新発売した。これは、この頃から流行しはじめたカートリッジ・吸入両方に兼用できる構造で、ペン先は細書・中書・太書の三種類で、軸はブルー・グレー・グリーン・ブラックの四色、十四金ペン、一本一、五〇〇〜二、五〇〇円であっ

た。昭和三十七年には、学生用・婦人用も発売した。

前にも述べた如く、ワンダーペンの需要は伸びる一方であった。これまでのワンダーペンは速乾油性で太書き用であったため、日暮里工場では、昭和三十七年、細書用小型ワンダーペンを開発、発売した。また昭和三十八年には、水性でペン先に各種の繊維を使用した細書用アテナドレスペンを、翌三十九年には現在のアテナサインペンを発売した。色も青・黒・赤其他と豊富になり、その後サインペンスケッチ用十色セットが発売された。

### 三 洋 品 ・ 雑 貨

当社の洋品の中心がこの頃、紳士用レインコート、ブレザー、替ズボン、ゴルフ用品であることには変わりなかったが、昭和三十四年に開設された財団法人クラフト・センター・ジャンの取扱う工芸品の仕入・販売は洋品部で行うことになり工芸品が新商品として加えられた。この工芸品は贈答品・装飾用品として需要は徐々に増してきた。それに関連して、昭和三十七年八月、本店一階売場南側一角の壁面を大理石で装飾、立体的に陳列したマープルコーナーを新設、生活を楽しむルームアクセサリなど、気のきいた贈答品向きの工芸品を展示した。

そのほかメリヤス製品は、子会社の丸善洋物卸店から全国の百貨店・専門店へ卸売を行っていたが、これらのメリヤス製品も改良を加え、昭和三十六年にウーリー加工の肌着、昭和三十九年にはカルナックシャツ、ネオバルクシャツ、昭和四十年にはライソフトシャツ、アライトシャツなど新製品を発売した。

この時期の洋品・雑貨で特に注目すべきことは、ジレット安全剃刀の輸入自由化に伴ない、当社が日本における

総代理店として全国的な販売活動を行なったことである。いま、そこに至った経緯を略述しておきたい。

当社は古くからオートストラップ社の日本代理店として同社のバレー安全剃刀を販売してきたが、同社は昭和初期ジレット社に合併され、ジレット社英国バレー工場として戦前は当社と取引を行ってきた。しかしジレットブランドの製品に対しては、当社は特に代理店契約は結んでいなかった。そこで戦後、社長が渡米した際ボストンのジレット社を訪問し、バレーばかりでなくジレット製品についても当社がその代理店となるよう交渉、以後渡米の度に交渉を続けていたが、昭和三十六年十一月多年の希望が実り、当社はジレットの総代理店の契約を結ぶに至った。しかし、安全剃刀の輸入自由化は、昭和三十五年十一月に安全剃刀のホルダー（替刃六枚付）とシェービングクリーム、ブラシに限られていて、国産品保護のため替刃の自由化は許可されていなかった。そこでその自由化を産省に強く要望した結果、昭和三十七年十一月十一日にやっと自由化の許可がおりた。

かくて、当社では、替刃輸入自由化に対処して前に述べたようにジレット部を新設し、全国的な販売を開始した。また卸売も丸善洋物卸店を通して、昭和三十八年四月から開始した。

昭和三十五―四十年の中間・歳暮贈答品

贈答品として人気の集まったのは、矢張り五〇〇円と二、〇〇〇円の品物であった。この点では、従来と大きな変化はなかった。

品物としては、靴下・肌着・毛布・御仕立券付ワイシャツ生地といったものが、相変らず根強い売れ行きを示していた。ラックス、キャメイ、カシミヤ、ブーケといった舶来石鹸（十六個入千円）、英国製マーゲットソーンウール

年度別	昭和三十六年	昭和三十七年	昭和三十八年	昭和三十九年	昭和四十年
販売台数	一、二七六	一、一一八	一、一五二	一、五四〇	八六九

昭和三十九年が売りのピークで、その後の扱い数は漸減の傾向が続くが、その最大の原因は既述したように電子計算機の設置及び電子式卓上計算機（電卓）の普及によるためである。

タイプライターは、昭和三十年代は買換えの時期にも達していたし、その上に海外貿易の拡大、政治・學術の交流の活発化が英文タイプライターの需要を益々盛んにした。

いま、当社におけるローヤルタイプライターのこの時期の販売台数をあげると次のようである。

年度別	昭和三十六年	昭和三十七年	昭和三十八年	昭和三十九年	昭和四十年
販売台数	一、八八四	一、三七四	二、三七六	二、三三四	二、一四五

とくに需要の多かったのは電動タイプライターとポータブルタイプライターであった。ポータブルタイプライターは、戦後、年と共に学者、文筆家、実務家、学生の間で愛用され需要が伸びた。

昭和三十八年四月一日―五月十三日には、ローヤルタイプライター生産台数一億台突破記念「ローヤル・ゴールデンセール」を、翌三十九年三月一日―五月三十一日には、「第二回ローヤル・ゴールデンセール」を実施した。

また、昭和三十九年十二月には、ローヤル・タイプライター社創立六十周年記念として同社から記念の置時計の

マフラー（千円―二千円）が多く売れたのもこの頃である。

このほかにイタリー製綿マット（千円）、英国製カーラッグ（三千円）、英国製ひざ掛（五千円）、当時まだ珍しかったドイツ製電気剃刀、ドイツ製ヘアドライヤー（五千円）なども進物品として良く売れた。

また昭和三十四年三月のクラフト・センター・ジャパン開設に伴い、進物品に工芸品が新たに加わり、鑄鉄の灰皿（三五〇円―五〇〇円）、合板を整形したトレイ（三五〇円―千円）、波佐見の茶器セット（千円）、花瓶（千円）等が、値段として手ごろなので、進物品として好評を得た。